排泄の民俗と民具　―済州島・韓半島・舟山島の比較―

高　光敏

1．論議の提起

生物は飲食の栄養を摂取して体内で分解し、必要のないものは体の外に出す。人間が飲食の栄養を摂取するのを食生活または食生活文化というが、これは地域によって多様である。また食生活に係わる民具を機能によって分類したりする[1]。動物が食べ物によって栄養を摂取し、そのかすを体の外に出すことを排泄という。排泄物の処理は地域によって多様であるが、今まで排泄の民俗についてはあまり論じられなかったし、排泄生活とか排泄生活文化とは呼ばない[2]。ここでは済州島、韓半島、そして中国舟山島の三つの地域を比較して、排泄民俗論[3]の可能性を模索したと思う。

2．済州島の排泄民俗

「魏志東夷伝」『三国志』馬韓条の末尾に州胡の記録がある。州胡とは済州島のことである。済州島の人々は「牛と豚の飼育を好む（好養牛及猪）」と記されている。猪とは豚のことである。

また、『済州島勢要覧』（1937 年）の「戸口」には、1936 年末の現在、済州島の戸数は 48,100 戸あったと記されていて、居住世帯の内訳は次のようになる。

分類	済州人	日本人	満州国人と中国人	その他の外国人
世帯数	47,682	384	32	2

表 1

同書の「養豚の現況」には、97%（46,657 戸）の戸数が豚を飼育していたことが記されている。この記事から推すると、済州人の家では必ず豚の飼育が行なわれていたことになる[4]。

朝鮮総督府は新羅の首都であった慶州郡を調査して、『生活状態調査』（1934 年）を作成した。この調査書の「畜産」によると、当時の慶州郡で家畜を飼っている 13,223 戸の中で、豚の飼養は 1,839 戸である[5]。全体の農家の中でわずか 13.9%で豚の飼養が行われていたということになる。

「魏志東夷伝」に記されている諸国の記事の中で、「豚の飼養を好む（好養猪）」という記述は、州胡（済州島）のみであることに注目する必要がある。豚の飼養を好む済州人の伝統は 1970 年頃まで続いていた。1961 年、5.16 軍事政変に成功した朴正熙は、1963 年民主共和党の総裁として第 5 代の大統領に就任する。そして 1970 年に生活環境の改善と所得増大のために「セマウル（新町）運動」を展開する。このころ便所改良の事業も行われることになって、済州島の伝統的な便所を兼ねた豚小屋もだんだんなくなっていく。

改良される以前の済州島の伝統的な便所はどのようなものだったのか。1970 年頃の済州道北済州郡涯月（エウォル）邑納邑里（ウプナッウプリ）の柳氏宅を見てみたいと思う。

不定形の石垣の中に母屋と離れが配置されている。便所は離れの左側に位置している。韓国のことわざに、「相舅の家と便所は遠いほどいい」といわれるように、母屋から比較的に遠いところに便所が置かれている。

済州島の家では便所で豚を飼養していた。豚を育てる便所を「トンシ」または「トットン」といった。トットンは、豚の小屋という意味で、土を 1 メートル深さで掘って石垣で囲んでめぐらして作った 10 坪前後のも

のである。そこでは、かなりの量の下肥が作り出された。

家毎にトットン（豚小屋）で出される下肥の量は異なった。普通 80 駄ほどで、裕福な家では 100 駄以上あった。一駄の下肥の重さは約 16 貫（60 kg）で、駄とは牛が 1 回に運ぶ重さの単位である。したがって、「80 駄トットン」、「100 駄トットン」という言葉がある。

トットンの片隅は上の一面を屋根で覆っているが、これが豚舎である。豚はここで寝たり雨宿りしたりする。ここをまた豚家ともいう。豚小屋の向側に石を削って作った豚の餌入れがある[6]。豚小屋の片隅にはかたちを整えた石が 2 つ並べられている。これを「チトゥルパン」という。人々はこのチトゥルパンに座って用を足した。すると、豚がぶうぶうと鼻を鳴らしながら来て、喜んでチトゥルパンの下でそれを食べた。

豚小屋の中では子豚を飼養した。豚は生後 30 ～ 40 日まで母豚の母乳で育つ。この頃の豚を「チャリットセギ」という。チャリットセギとは、魚名であるチャリ（スズメダイ）のように小さいトセギ（豚）であるという意味である。チャリットセギは豚小屋で一年間飼養されると、成長豚になったと考えられた。この豚を「一歳を迎えた豚」と言った。

豚小屋の中には、随時牛小屋からの肥やしや海藻、牛馬の糞などで足された。トットンは、肥を作り出す工場のようなものであった。

済州島の排泄空間は、豚舎・便所・堆肥の一体型である。

図 1　済州島の民家（康幸生　1985）

写真 1　トイレ（手前）と豚小屋（奥）（洪貞杓撮影 1960 年代）

3．韓半島の排泄民俗

高橋昇は 1940 年 11 月、南海島（当時の行政上は、南海郡昌善面富潤里である）の朴氏宅の農家を踏査して、その家の平面図を描いた[7]。当時この家は昌善面で知られている裕福な家であった。トヤジシリという豚舎、トンシという便所、それから牛小屋と豚小屋から出る堆肥を積み上げておく堆肥場がそれぞれあった[8]。

南海島では豚舎、便所、堆肥倉庫が 3 つに分離されている。済州島の場合はこれらが豚小屋 1 つに統合されて一体型になっており、対照的である。

朝鮮半島の便所は、もともと穴厠式であった[9]。土に穴を掘って、その上に板を 2 つ並べてかけ、そこに座って用を足した。人糞は穴に貯められた。人糞が腐ってくると、その水分が土に染み込むこともあった。これを防ぐために人糞の上に灰や籾殻を撒いた。灰や籾殻は、水分を吸収するだけではなく、人糞と一緒に腐って肥やしになる[10]。

図２　南海島の朴氏の住居

写真２　下肥の運搬（巨済島）

写真３　肥料運搬の横樽（関東大学校博物館）

（図２、写真２は高橋昇『朝鮮半島の農法と農民』未来社　1998）

韓半島では、麦の播種の時、人糞を基肥や追肥として使い、「トンチャンクン」という運搬具で運んだ。

４．舟山島の排泄民俗[11]

舟山島では、家の片隅にある１～２坪くらいの厠に、大小便を溜める容器をおいてあるが、これを「糞桶」という。糞桶は円筒状の木材容器で、その中に柱を立てて横棒をさしてあって、用をたすとき柱は背もたれの役割をする。この柱は飲み水を運ぶ水桶の柱より長くて[12]、大人用と子供用があるが、形などは水桶とほぼ同じである。

夜に用を足す木桶を「夜桶」いうが、これには蓋があって椅子の上にのせて寝床におく。椅子には背もたれがあったりなかったりするが、夜桶の排泄物は翌朝、糞桶に移す。

糞桶に糞尿がある程度溜まると、天秤棒で１人が２つを、または１つの桶を２人が運んだりするのは水桶と同じである。畑の入口には土の中に大きい甕を埋めてあるが、この甕は水甕で使われていたものであった可能性が高い[13]。この甕は「糞甕（原文、糞缸）」と呼ばれるが、糞桶の排泄物をこれに移して熟成させる。

写真４　家の隅のトイレ
（嵊泗島　2005）

写真５　夜 桶（嵊泗島）
高さ 32.5 ㎝

写真６　下肥の運搬
（嵊泗島）

写真７　糞甕
（嵊泗島）

糞甕には雨水が入るのを防ぐために蓋をして、棒で甕の中の糞尿をかき混ぜたりする[14]。

糞甕の排泄物は、畑の追肥として使われるが、甕から肥を取り出す器を「流子」という[15]。

５．まとめ

３つの地域で行なわれる排泄民俗は、２つに大別できる。済州島では人糞を豚の飼料に、韓半島と舟山島では、肥料に利用する。

韓半島では土厠式の厠で、ほぼ１年間、人糞を熟成させ、トンチャンクンに移して畑に運搬する。麦の播種の時、基肥や追肥として利用する。

一方、舟山島では桶厠式の厠で、夜桶と糞桶が一杯になると運び出して、畑にある糞甕に移して、そこで熟成させてから追肥として使う。

このように、韓半島と舟山島の排泄民俗は極めて対照的である。桶厠式の排泄民俗文化圏の舟山島では、食生活用具と排泄用具が次のように分類される。

食生活用具	水桶	水甕	水凹斗
排泄用具	糞桶	糞甕	流子

表２

排泄民俗の共通点と差異点の文化的背景については、今後の課題にしたいと思う。

＊ 本論考は東北芸術工科大学の李恵燕氏の翻訳である。

1 宮本馨太郎『図録　民具入門事典』（柏書房）には、食生活用具を「貯蔵用具」・「炊事用具」・「調理・調整」・「嗜好品」・「飲食品」・「製造」に細分している。

2 排泄民俗の研究の少ない中で、スチュアート・ヘンリの『トイレと文化』考 – はばかりながら』（文春文庫、1993 年）が、研究者に示唆したものは大と思われる。

3 物質の代謝（摂取して排泄する）は、生物に限らず田畑でも行なわれる。田畑で行なわれる排水は、生物にたとえるならば、排泄にあたる。水田における排水は、稲が単細胞物質におかされ病気になる危険があるとき、韓半島では살포（サルポ）というスキで排水路を作ってあげる。サルポは田畑兼用の排水民具として使われる。畑では溝が排水路になるので、畑の畝や溝を作るスキやクワなどは畑の排水路をつくる排水農具ともいえる。田畑の排水方法と排水農具は地域によって多様であり、本稿で扱っている「排泄の民俗」とも深く係わっているものである。

4 田口象次郎『済州島勢要覧』済州島庁　1937 年

5 朝鮮総督府　『生活状態調査』　1934 年

6 これを「トットコリ」という。「ト」とは豚で、「トコリ」とは、器を意味する済州語である。トットコリは、石を丸く、または四角に刳り抜いて作ったものである。トットコリは普通 10 升（18 リットル）ほどの豚の餌が入る大きさだったが、豚が在来種から雑種に代わっていくにつれ、トットコリは少しずつ大きくなっていった。残飯を随時トットコリに足して豚に食べさせた。豚小屋の中にあるトットコリは、豚小屋の藁屑の上に置いてある。トットコリは重い石で作られているので、藁積みの中に段々埋まっていく。すると、豚小屋の下肥汁やこれらが染み込んで腐りかけている藁屑などがトットコリの中に入ってしまう。そのたび、鉄製の熊手鍬などでトットコリを傾けて、その下に藁屑を差し入れて高くした。

7 高橋昇　『朝鮮半島の農法と農民』　未来社　1998 年

8 金知民（木浦大学校建築科教授）荷衣島（ハウィド）（行政上、全羅南道新安郡荷衣面大里）朴亨心氏の家屋（1797 年建築）の厠を実測したものによると、厠は便所と堆肥を貯蔵するところであった。
全羅南道木浦大学校博物館『南西海島嶼地域の伝統家屋・마을（村）』1989 年

9 村上唯吉　『朝鮮人の衣食住』　1916 年

10 植民地時代の 1920 年前後して、朝鮮総督府は便所改良事業を広く行なった。農家は補助金をもらってセメントで便所の穴を作った。セメント穴の規模は、横 8 尺（約 240 ㎝）、縦 4 尺（約 120 ㎝）、深さ 6 尺（約 180 ㎝）であった。セメントの穴になってからは人糞が土に染み込むことはなくなったので、人糞の上に灰や籾殻を撒くことも段々減っていった。これは、京畿道儀旺市草平洞 401 番地の鄭禧鉉氏（男、1926 年生）の話である。

11 筆者は、2004 年度、韓国学術振興財団基礎学問育成課題の一つである「中国舟山群島の海洋民俗の調査・研究」（課題番号 2004 – 1072 – AS3020）の研究員として参加した。「４　舟山島の排泄民俗」は、2005 年 1 月 17 日～ 27 日、中国舟山島とその周辺の諸島を踏査した際、得られた内容である。

12 水桶の柱より、糞桶のものが長い理由は、２つ挙げられる。まず、糞桶の上に座って用を足す際、柱が背もたれの役割をするので長い方が、安定感がある。次に、糞桶を天秤棒で運ぶ時、柱が長い方が、人糞が飛び跳ねて衣や体に付くことが少ない。

13 ここでは、水甕を「水缸」という。

14 筆者は、舟山島から上海まで移動するバスの中、車窓から外の風景を観察したが、畑のあちらこちらに糞甕がおかれてあった。

15 日本の附属島嶼の１つである壱岐島「壱岐風土記の丘　古民家園」では、厠の人糞を木桶に移したり、畑で追肥として人糞をやる時に使われる用具を「水桶」という。厠の人糞を木桶に移して、天秤棒を肩にかけて運ぶが、このときの木桶を「肥桶」といい、畑で人糞を熟成させる甕を「肥ため」という（壱岐郷土館の市山等館長の教示による）。